

## レトロのアルバムに先輩しのぶ

### 新メンバー迎える研究室の様様替え完了

冬学期より、当研究室には新たに8名のメンバーが加わる予定となっている。学期開講を目前に控えた9月22日、9階および10階院生室の様様替えが行われた。特に9階院生室では、M1の大半がイタリア滞在中のため人手不足で作業は長引いたが、大がかりな配置換えを行って新メンバー用のデスク・スペースを捻出した。9階の棚上から崩れ落ちてきたやや時代遅れの貼り込み式アルバム、懐かしい往年のメンバーだ。



前列・右から3番目が西村教授



後列・左から4番目が北沢教授  
(もう一人おなじみの顔も・・・)

研究室の組み替えは、ほぼ半日がかりの作業だった。10月から9階ではスタッフ・院生・研究生計16名が、10階ではスタッフ・院生・研究生計19名が、それぞれ一部屋に会することとなる。夏は過ぎたが、研究室の熱気は秋からいっそうヒートアップする勢いだ。新メンバーの紹介は、次号以降に掲載予定。



ダンボールの中からレトロアルバムが・・・

9階の棚上から現れたレトロのアルバム。中を開けば、都市工1期生からの集合写真。工学部進学時(3年生時)に撮影したものが年代順にずらり。当然、当研究室の両教授の写真も。西村教授が、今と変わらぬ憂いと正義感を湛えた表情で凛とカメラを見つめれば、北沢教授は意外や、繊細素朴な面持ちで後方に控えめに収まる。都市工に入りたて、二十歳のころの思い出の一葉、両教授も懐かしさ甘酸っぱさ相半ばしつつ苦笑いの一幕。

### 2階演習準備室も清掃

合わせて清掃を行った2階演習準備室では、60~80年代の洋雑誌群が棚を埋めており、入りきらない分が大量にダンボール詰めになっていた。都市工草創期に丹下研究室が収集した貴重なコレクション、今後の行く末が注目される。



1966年の『The Architectural Review』

## さあ、これからです、卒論会議再開

院試の関係で、7月以来休止していた卒論会議ですが、9月22日に再開しました。この日は4年生4名がそれぞれの卒業設計、論文の構想を発表しました。石井君は、景観＝視覚の次にくるものを探して、嗅覚、聴覚と都市形成との関係を探ろうとしています。伊藤君は、神田川一筋。川歩きを敢行し、現地をつぶさに見学し、幾つかの設計対象地を選んできました。進藤さんも、やはり川。地元立川の残堀川周辺で、コミュニティ・ガーデンの提案を考えているとのこと。そして増田君は、駅と眺め。高架駅で遠くを眺められたら、ちょっとほっとするよね、とロマン派です。さて、今回事情により欠席の3名も含めて、2月までの5ヶ月間で、どんな風にそれぞれのテーマをものにしていくのか、都市デザイン研マガジンでも継続報道していきます。

### おおのむら・・曲家開放実験「えんがわカフェ」大盛況



野原助手の不敗神話（無降水記録）崩壊の雨降りしきる9月25日、大野村水沢地域で「みずさわ縄文きてけろ祭 in 長月」が開催されました。特にM1竹山・西原の監修により、茅葺き曲家を実験的に開放させていただき、一日だけの「えんがわカフェ」をOPEN。阪口店長、戸田マスターの下、地域の中高生を中心に営業し、大盛況と相成りました。中では囲炉裏のぬくもりを囲み、昨年度地域づくり計画みっちゃあミュージアム構想や茅葺き要覧、竹山卒業設計「たがいまおかえり」の展示を見ながら、おおのパン工房のパン試食とコーヒーでホッと一息。



後列左から2人目が大鳴門親方

**両国まちあるき&旧国技館史をたどる** 研究室メンバー有志で、大相撲観戦（9月場所4日目）・両国周辺まちあるきを行いました。まずは、先代の蔵前国技館（現東京都水処理場）、旧両国国技館（現両国シティコア）を訪れ、隅田川沿岸で展開されてきた国技館の苦難の歴史をたどりました。最後は銅板葺きの屋根が美しい現両国国技館（昭和59年竣工）です。当地は総武線の東京駅延伸に伴って売却された操車場跡を相撲協会が取得した土地です。肝心の相撲観戦も充実し、打ち上げは、研究室がまちづくりのお手伝いをしています富山県八尾出身という大鳴門親方（琴ヶ梅）のお店でちゃんこ料理を堪能しました。

### ◆4年生インタビュー◆<第5回>伊藤くん

東京の高井戸、清掃工場の煙突を見ながら育ちました。昔から「まち」をつくることに興味があって建築系志望。建築や土木とも迷ったんですが、研究内容の幅の広さで都市工を選びました。建築は、正直ちょっとつらそうかな、との思いもあったので。3年生の住宅地設計演習がものすごく楽しくて、これはデザ研しかないな、と。大学院に進んだら、国内外の都市をいろいろ見て回りたいと考えてます。特に、まだ行ったことのないヨーロッパに。あとは、PCのスキルをもっと磨いていきたいですね。

**編集後記** 「世界は大きな学校であり、東大などというちっぽけな学校とは、くらべものにならぬ大きさの学校である」とは、なだいなだの言葉である。そうかもしれないが、大学の中は中でちっちゃな世界が無数に増え、院生がいればそこが大学院、学部生がいればそこが大学。中世の大学のように教授がいたらそこが大学という、ある意味で理想的な変革期である。しかし、年2回院生を迎え入れる研究室の模様替えは大変。レトロのアルバムで一息入れていた。（酒井）